随筆

戦争体験から思うこと

伊藤 駿二郎
いとう しゅんじろう

一　はじめに

私には、兵役や爆撃を受けた体験はないが、勤労動員、政府の言論統制、軍事訓練などが強く印象に残っている。

昭和十六年十二月に勃発した太平洋戦争は、緒戦では優勢だったが、十七年六月のミッドウエー海戦で日本軍が大敗し、以後戦況は著しく不利となり、物資の不足も深刻になった。

このような状況のなかで、二十年三月には、国民学校初等科を除くすべての学校で一年間授業停止となり（決戦教育措置要綱）、学生や生徒は軍隊や生産現場に動員された。

二　軍の壕堀り作業に動員される

当時中学生だった私たちが動員されたのは、長野県辰野町の山地に巨大な壕を掘る作業である。そこでは兵士や地域から動員された多くの人々が働いていたが、私たちは掘り出された多量の土石をモッコで低地まで運ぶ作業に従事した。何のための壕か、壕内規模や内部でどのような人々が作業しているかは全く分からなかった。この作業には一週間交代で二回従事したが、十五才の少年たちにとっては厳しい作業であった。作業の辛さや授業のない不満は、生徒間では話題になっても外には出せなかった。当時、国民を国策に従わせる殺し文句は、『お国のために』、『戦争に勝つために』であった。そして国策に従わない人には『非国民』という言葉が浴びせられた。ただ兵士や地域の人々が「がんばって」といって勇気づけてくれたのが嬉しかった。

余談になるが、この壕は未完のまま終戦と同時に放置された。壕の掘られた目的は明らかでないが、当時、軍部は戦争が本土決戦となった場合、大本営を松代（現長野市）に移し、諏訪を決戦場と考えていたようである。壕は、連合軍を要撃するために、戦車、武器、弾薬などを備蓄する掩体壕ではなかったかと言われている。

三　戦時中の厳しい言論・情報統制

戦時中は軍事機密ということもあって、壕掘りの例にも見られるように、国民に必要で正しい情報に全く欠けていた。当時、戦争に関する情報は大本営が発表していたが、戦果は誇大に、損害は軽微に報道されるのが常であった。例えばミッドウエー海戦で日本軍の空母四隻が失われているのに一隻と発表し、航空機についても同様である。だから国民は、日本軍の戦力の大半が失われているのに、連合軍に対する最後の反撃が可能と信じていた。加えて日本は神国であるから神風が吹くだろうと期待する人もいた（非科学的な歴史観・教育）。しかし、その結果は惨憺たる敗北であった。

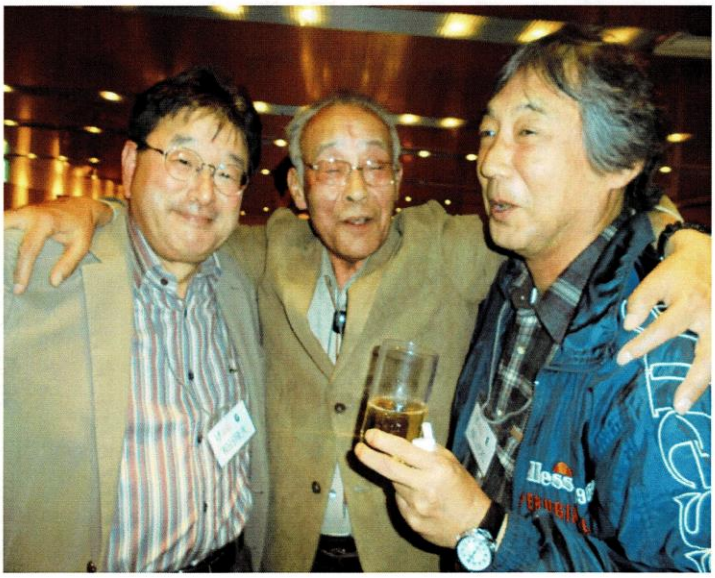
四　おわりに

私は、再び戦争の時代を体験したいとは思わない。学業の機会を奪われ、戦場や意に沿わない労働にかり出されたくない。戦争は双方にとって人間性の否定である。平和な世界で、それぞれが自己実現を果たしていくことが幸福な人生といえるであろう。最近、わが国では、政府の報道規制ともいえる事例や、自由に自分の意見を言えない雰囲気がただよっている。民主主義社会の健全な発展には何より言論・報道の自由が大切である。私は自由と平和を守りたい。

●編集部より

伊藤駿二郎先生は、都立忍岡高校の恩師です。

文の内容とは関係ありませんが、ここに伊藤駿二郎先生の元気なお姿を掲載しておきたいと思います。先生もご了承して下さると思いますので。

二〇一五年一一月、高校の同期会にて

（同期の悪友　川上宏君撮影）